

ロボット工学セミナーのご案内

主催：(社)日本ロボット学会

協賛：計測自動制御学会、精密工学会、電気学会、電子情報通信学会、土木学会、日本機械学会、

(予定)日本ロボット工業会、農業機械学会、自動化推進協会、バイオメカニクス学会、産業技術連携推進会議、機械・金属連合部会／福祉技術部会、機械技術協会、応用物理学会、人工知能学会、日本神経回路学会、システム制御情報学会、情報処理学会、日本人間工学会、日本時計学会、日本バーチャルリアリティ学会、日本設計工学会、日本コンピュータ外科学会

第55回シンポジウム 共生ロボットの愛着のデザイン

日時：2009年11月20日(金)13:30～18:30(13:00開場)

会場：[中央大学 後楽園キャンパス 5号館 2階 5236教室](#)

東京都文京区春日1-13-27, 東京メトロ丸の内線・南北線『後楽園駅』から徒歩5分, 都営三田線・大江戸線『春日駅』から徒歩7分, JR総武線『水道橋駅』から徒歩15分

定員：140名

(定員になり次第締め切らせていただきます)

参加費：会員／協賛学会員 8,400円, 学生(一律)4,200円, 会員外 12,600円(税込)

口上：近年、認知や心理、AI、対話、インタフェース等の研究分野において、コミュニケーションロボットやインタラクションの研究が盛んに行われ、共生ロボットのインテリジェント化が進められています。しかし、人間とロボットとの真の共生を実現するためには、パラダイムを変えるような大きな飛躍が必要とされています。本セミナーでは、AIの歴史を振り返りつつ、新たな切り口や試みとなる研究を紹介することで、真の共生に向けた飛躍のための課題や展望を考える機会を提供します。

オーガナイザー：安藤友人(NEC)、長田純一(NECデザイン&プロモーション(株))

講演内容：

13:30-13:40 <開会挨拶・講師紹介>

13:40-14:40 第1話 役に立つロボットではなく愛されるロボットを

はこだて未来大学 松原仁

人間同士のコミュニケーションを考えると、必ずしも相手が自分にとって役に立つから付き合っているのではない。この人は自分にとって役に立つから付き合う、役に立たないから付き合わない、と判断をしなければいけないとすれば、すでにその時点でその人との関わりが希薄であることを示している。付き合うこと自体が楽しい相手とはそういう判断なしに付き合っている。人間とロボットのコミュニケーションも同様と考えられる。いまのロボットは人間にとって役に立つから付き合ってもらっているにすぎない。役立たずと判断されればすぐに付き合いはなくなる。あるいは役に立っているときだけの付き合いに限定される。人間と共生するロボットを実現するためには、役に立つという観点ではなく、付き合い自体が楽しい、すなわち愛されるという観点が重要である。ここではロボットが愛されるためには何が必要かを人間を手本にAIや認知科学の知見を踏まえて考察する。

14:40-15:40 第2話 愛着感を持てるロボットと扱いやすくて有用なロボット

放送大学・総合研究大学院大学 黒須正明

人工物の設計を、その利用者への適合性という観点から考えようとする、ロボットについても、人が「それ」に何を期待しているか、どのようにして「それ」によって期待を満たせばよいのかを考えることが基本となる。ちょっと甘い物が欲しい時に柿の種を出されてもうれしくない。また、その期待がどの程度切実なものかも大切なポイントである。独り暮らしは寂しいといっても、やたらお喋りで世話焼きな女がやってきたらちょっとうざいと感ずる男もいる。期待する水準と達成される水準のギャップを最小にすることも必要なのだ。目標が明確に同定できたら、そこに適切な品質特性を持たせるべく設計を行う。私はこの品質特性の代表として、感性的魅力とユーザビリティの二つに注目している。愛着感はその一つであり、扱いやすさや有用さは後者の言い換えとなる。この両者はなかなか同時に満足な水準で達成することが難しく、達成目標によってそれぞれに期待する水準も異なっている。もちろん、品質目標を設定しても、それを確実に達成できる設計が実現できるかどうかは別の話だ。このようなことを考える設計開発のアプローチを人間中心設計というが、私はそうした視点からロボットという人工物のあり方を考えてみたい。

15:40-15:55 <休憩>

15:55-16:55 第3話 漫才ロボット「パペじろう」の真実 - 国際学会からM-1グランプリまでを通じて感じたオーディエンスの実態! -

吉本興業(株) ぜんじろう

「お笑い」のノウハウや手法を応用し、ロボットならではの「ユーモア」の可能性を探る目的で、相手として漫才をするロボット「パペじろう」を開発した。そして、パペじろうと漫才をやり始めて5年が経過した。その間、国内外の学会やイベント等で、パペじろうとのパフォーマンスや人間とロボットとの笑いの関係など研究発表を行ってきた。そこで得られた知見は、ロボットは、人の年齢や性別、国籍や文化を越えた次元で訴えかけるパワーを持っている事である。また「面白さ」は、ロボットだけでなく、それを開発した背景やプロセス、開発者の立ち振る舞いまでもが大きく影響するという事である。反対に、興味の無い人には何をしても全く反応しない…。本講演では、体験談を基にパペじろうにまつわる数々の真実や、現在・今後の活動などを紹介し、今後のロボット開発に求められる課題を考えていきたい。

16:55-17:55 第4話 ヒトとロボットの未来は？ 物語が描いてきた共生のデザイン

作家 瀬名秀明

ヒトとロボットの未来を考えるにあたって、まず考えなければならないのは「生命」と「コミュニケーション」の(再)定義である。20世紀にはシャノンが「情報」を、チューリングが「知能」を、それぞれ限定的にせよ定義したことで、情報工学や知能工学が飛躍的に進み、今日のロボット学をつくり上げた。しかしついには人類は20世紀中に「生命」と「コミュニケーション」の定義を持ち得ず、そのことはロボット学が今後発展するために大きな障壁となっているように思える。「生命」と「コミュニケーション」の混同を見直し、物語の中で描かれてきたヒトとロボットのあり方を改めて振り返ってみたい。また21世紀に入り、海外では新しいタイプのSF小説が登場してきている。そこで描かれている未来は、ヒトとロボットの共生デザインにどのようなヴィジョンを投げかけているのだろう。いくつかの事例を紹介しつつ、作家の立場から発表したい。

- 17:55-18:25 <全体質疑応答&パネルディスカッション> 共生ロボットの愛着のデザイン
コーディネータ:長田純一(NECデザイン&プロモーション(株))
18:25-18:30 <閉会挨拶>
-

[\(申込方法\)](#)

[ロボット工学セミナートップページに戻る](#)